

慶應義塾とイエール大学

——世紀転換期における法学・社会学・哲学の継受——

小川原 正道

- 一、はじめに
- 二、明治期にイエールに留学した慶應義塾関係者
- 三、世紀転換期の留学——背景と経緯
- 四、むすび——留学の成果・意義

一、はじめに

慶應義塾と歴史的に関わりの深いアメリカの大学というと、まず、ハーバード大学を思い浮かべる人が多いであろう。福沢諭吉が義塾に大学部を設けるにあたって、一八八九年（明治二十二年）に宣教師のアーサー・M・ナップを介してハーバード大学総長チャールズ・W・エリオットに親書を送り、その結果、ジョン・H・ウイグモア、ギャレット・ドロップス、ウイリアム・S・リスカムの三名がそれぞれ法律科、理財科、文学科の主任教師として招聘されたことは、よく知られている。福沢はこの親書の中で、大学部を「a Japanese branch of

Harvard University」のようなものにした⁽¹⁾いとまで述べていた。この三名については、それぞれ、法律学、経済学、英文学などの分野で、研究が深められてきている。⁽²⁾

都倉武之氏によれば、三人のうち特にウイグモアは日本滞在を満喫し、福沢との交遊などを楽しんだという。福沢は慶應義塾とハーバード大学の間で留学のための特別な協定を結ぶことを模索し、大学部第一期生の池田成彬（のち、日銀総裁）も、ハーバードに入学した。この協定は実現しなかったものの、その後もハーバードは塾生や教員の主要な留学先の一つとなり、多くのハーバードの教授も義塾に招聘されて、エリオット自身も総長引退後に来日して三田演説館で講演した。ウイグモアは一九三五年（昭和十年）に再来日して義塾で演説しており、翌年にハーバードから義塾に創立三百年記念式典への招待状が届くと、ウイグモアは塾長・小泉信三の渡米を後押しし、実際に小泉は渡米することとなった。小泉はハーバードでジェームズ・B・コナント総長と会見し、式典に参加、その後、マサチューセッツ工科大学（MIT）やコロンビア大学、イェール大学などを視察したが、その際に紹介状を書いたのもウイグモアであった。一九六三年にはハーバードが小泉に名誉博士号を授与する旨を打診したが、病床の小泉は授与式に参加できず、辞退している。こうした経緯を踏まえて、都倉氏は、「ハーバードと義塾の縁は長く深いのであり、これは義塾の財産といえるだろう」としている。⁽³⁾

さて、明治の日本人にとって、アメリカの大学といえは、まずハーバード大学とイェール大学を思い浮かべる人が多かったらしく、一八九六年から一八九九年にかけてイェールに留学した松本亦太郎（のち、東京帝国大学教授）は、「米国で最も名声のあつた大学はイェールとハヴァードの両大学であつたから、日本から行く者は其孰れかを選んだのである」と証言している。⁽⁴⁾新渡戸稲造は一八九一年に刊行した『日米関係史』で、一八七一年から一八八六年までの間に、「ハーバード大学には、最も優秀な若者」が留学しており、計十五名が法律や医学などを専攻したと述べており、ほぼ同時期に「イェール大学には、約二十名の若者たちが留学したが、うち法律専攻

者が大半を占めた」と記している。⁽⁵⁾

実際、明治期に慶應義塾からイエール大学に留学した人物も少なくなく、杉井六郎氏によると、明治期の日本人イエール留学生の出身学校のうち、最多の留学生を送り出したのは同志社で、第二位が慶應義塾となっている。⁽⁶⁾一八九九年にはじまった慶應義塾派遣留学生の初期における留学先をみても、堀江帰一と堀切善兵衛はハーバード大学、田中一貞と岡本謙三郎はイエール大学、名取和作と板倉卓造はコロンビア大学に学んでいる。⁽⁷⁾しかしこれまで、義塾とハーバードとの関係は語られても、イエールとの関わりについて、論じられることは少なかった。そこで本稿では、まず、明治期にイエール大学に留学した慶應義塾関係者をあきらかにし、留学の時期や専攻などの傾向について論じたい。その上で、留学生が集中している、二〇世紀を迎える世紀転換期に焦点をあて、当該期にイエールに学んだ政尾藤吉、田中一貞、柴田一能、岡本謙三郎の四名を事例として取り上げて、彼等の留学の背景と経緯、特に留学中に習得した法学や社会学、哲学などの内容を検討し、最後に、彼等の留学の成果と意義について考察する。

二、明治期にイエールに留学した慶應義塾関係者

杉井氏が、イエール大学図書館が所蔵する各年度の学生カタログをもとに作成した明治期の日本人イエール留学生のリストである「イエール大学在籍者リスト」⁽⁹⁾と、慶應義塾の入学記録である『慶應義塾入社帳』⁽¹⁰⁾を照合して、明治期にイエール大学に留学した慶應義塾関係者を以下に、在籍年順に紹介しておきたい。同リストおよび先行研究などにより、イエールでの専攻分野、および取得学位が判明している場合は、それも付記した。

- ・津田純一 (一八七五年～一八七七年) ☆ 法律学
- ・箕作佳吉 (一八七七年～一八七九年) ☆ 生物学
- ・岡部長職 (一八七九年～一八八一年) ☆ 生物学
- ・政尾藤吉 (一八九五年～一八九七年) ☆ 法律学
- ・三浦慶三郎 (一八九七年～一八九八年) ☆ 法律学
- ・若松忠太郎 (一八九八年～一九〇〇年) ☆ 電気工学
- ・松本宗吾 (一八九九年～一九〇一年) Master of Arts
- ・田中一貞 (一九〇一年～一九〇二年) Master of Arts
- ・柴田一能 (一九〇一年～一九〇二年) 宗教哲学
- ・蔵田宜彦 (一九〇一年～一九〇四年) Master of Arts
- ・山崎快英 (一九〇一年～一九〇五年) 哲学
- ・平野一郎 (一九〇二年～一九〇六年) 経済学
- ・石村誠一 (一九〇三年～一九〇四年) 政治経済学
- ・鈴木市之助 (一九〇五年～一九〇六年) 経済学
- ・藤山九一 (一九〇五年～一九〇六年) 経済学
- ・松尾武夫 (一九〇五年～一九〇七年) 経済学
- ・瀬川巖 (一九〇五年～一九〇七年) ○ Master of Arts
- ・高橋政次郎 (一九〇六年～一九〇八年) 歴史学
- ・稲岡世民 (一九〇七年～一九〇八年) ☆ Master of Arts
- ・岡本謙三郎 (一九〇七年～一九〇九年) 英文学
- ・柳雄吉 (一九〇七年～一九一〇年) ○ Master of Arts
- ・ 経済学

以上は、☆印と○印のついている人物を除いて、「イエール大学在籍者リスト」に日本での最終学歴として「Keio」と記載されており、『慶應義塾入社帳』でも氏名が確認できた人物である。☆印は、「イエール大学在籍者リスト」に日本での最終学歴として「Keio」の記載がないが、『慶應義塾入社帳』には氏名があり、慶應義塾への入学年や出身地、これまでの研究などから、義塾を経てイエール大学に学んだことが確実な人物である。

『慶應義塾入社帳』には、一九〇一年十一月までに入学した者しか記載されていないため、一九〇一年十二月以降に入学した人物については、「イエール大学在籍者リスト」と照合することができない。○印は、「イエール大学在籍者リスト」に日本での最終学歴として「Keio」と記載されているものの、『慶應義塾入社帳』には氏名が記載されていない人物は、「Segawa Iwao」「Inouye Tora」「Tzumi Akira」「Yanagi Yukiichi」の四名がこれに該当する。彼等は一九〇一年十二月以降の義塾入学者だと思われるため、慶應義塾の卒業生名簿である『慶應義塾塾員姓名録』『慶應義塾塾員名簿』⁽¹¹⁾および、『マイクロフィルム版福沢関係文書』に収録されている「卒業生名簿」⁽¹²⁾を調査したところ、いずれも氏名は確認できなかった。ただし、『Segawa Iwao』と「Yanagi Yukiichi」については、慶應義塾大学の学籍簿に記載があり、氏名が「瀬川巖」、「柳雄吉」であることが判明した。⁽¹³⁾いずれも卒業はせずに退学あるいは除籍となっており、「Inouye Tora」と「Tzumi Akira」についても同様だと思われるが、学籍簿で氏名が確認できなかったため、この二名はリストから除外した。

以上を踏まえると、明治期にイエール大学に留学したことが確実な慶應義塾関係者は二十一名となる。イエールに入学した最初の日本人は一八七〇年入学の大原令之助（本名・吉原重俊、のち、日銀総裁）⁽¹⁴⁾で、義塾関係者でも、最も早い入学者の津田純一（のち、兵庫県師範学校長）が一八七五年、続く箕作佳吉（のち、東京帝国大学教授）が一八七七年、さらに岡部長職（のち、司法大臣）が一八七九年という初期の段階で入学しているが、⁽¹⁵⁾それ以外の人物は、一八九五年から一九一〇年の間に留学期間が集中しているのが、特徴的である。専攻分野は、前

半期はかなりのばらつきがみられ、後半期はほとんどが経済学になっているが、いわゆる文系に偏っており、理系の学問を専攻したのは箕作と岡部、若松しかない。全体の約三分の一が修士号、政尾のみ博士号を取得した。この間、一八八〇年代には誰も入学しておらず、その原因は定かでないが、一八七七年の西南戦争前後から士族の困窮などによって慶應義塾は経営の危機に陥っており、一八八〇年代は松方デフレによる不況で都市住民や農民が困窮したことはよく知られている。これにより、義塾関係者も留学にかかる費用を捻出することが困難になっていたのではないかと推測される。

辻直人氏は、「エール大学には慶應義塾出身者が一八九六年と九七年に各一名入学した後、一九〇〇年～一九〇九年には計十三名の塾関係留学生が入学している。ただしその後は一九二〇年代に三名入学したにとどまっている」として、一八七〇年から一九三七年までの日本人イェール大学留学生の情報を記載した「エール大学日本学生名簿」⁽¹⁷⁾の中で、「最も古い慶應義塾出身留学生」として若松忠太郎と松本宗吾を挙げ、両名が一八九七年時点で在籍していたとしている⁽¹⁸⁾。ここにいう慶應義塾出身者は卒業生のみを指しているのかもしれないが、これを卒業生だけでなく在籍者まで広げると、右のリストの通り、イェールにはすでに一八七〇年代に津田、箕作、岡部の三名の義塾関係者が入学しており、若松、松本の前には、政尾藤吉、三浦慶三郎も入学していた。また、「イェール大学在籍者リスト」に依るならば、若松の入学年は一八九八年、松本の入学年は一八九九年である⁽¹⁹⁾。もっとも、一九〇九年で義塾からの入学者が一旦途絶え、一九二〇年代まで入学者がいらないという指摘は、明治期のみを分析対象としている本稿に示唆する点は大きい。辻氏は、慶應義塾派遣留学生として、義塾が校費をもってイェールに派遣したのは田中一貞と岡本謙三郎のみであり、それ以外の塾員や教職員は自費による留学であり、特に明治期においては、こうした自費留学が多数を占める傾向がみられていたと指摘しているが、そうした傾向は、このリストからもうかがえよう⁽²⁰⁾。

三、世紀転換期の留学——背景と経緯

なぜ、多くの慶應義塾関係者が二〇世紀を迎える前後の世紀転換期にイエール大学で学んだのか。留学の経緯や背景がある程度判明する人物について、個別に検証しておく。

まず、留学の経緯が比較的詳しくわかっているのは、政尾藤吉である。主に香川孝三氏の研究⁽²¹⁾に依って、その経緯をみていきたい。

政尾藤吉は一八七〇年に愛媛県に生まれ、喜多学校を経て大阪に出て、ミッション・スクールに学び、一八八八年十一月に慶應義塾に入学した。⁽²²⁾ 同じ頃に、中村敬宇の同人社にも入っていたらしいが、一八八九年三月には東京専門学校に転じている。義塾にいたのはわずかであったが、東京専門学校も四ヶ月在籍しただけで英語普通科を卒業し、翌年には関西学院に転じた。この間、広島英和女学校で教えていたらしく、そこで貯めた資金などをもとに、渡米した。香川氏は、政尾のアメリカ留学の動機として、立身出世を目指したこと、英語に磨きをかけてきたこと、私費での留学が可能と判断したこと、そして徴兵猶予の特典を得るため、の四点を挙げている。⁽²³⁾

政尾はまず、一八九一年十月にヴァンダービルト大学に入学して神学とりベラル・アーツを学び、その後、ウエスト・ヴァージニア大学のロー・スクールに転校して卒業、弁護士登録をした。その上で、イエール大学に学んでいた友人から、東京専門学校の先輩である杉田金之助がイエールで博士号を取得したと聞き、一八九五年にイエール・ロー・スクールに入学、松本亦太郎など、日本人留学生と一緒に暮らし、一八九七年に「日本の新しい民法典」の論文で博士号を取得する。松本は、政尾が流暢なラテン語でこの論文の末尾を朗読し、大喝采を受けていたと回顧している。⁽²⁴⁾ 指導教授はサイモン・E・ボールドウィン教授で、政尾とは生涯にわたって連絡を取り合う恩師となる。政尾は在学中に、イエールの助手として月給二五〇ドルを得ていたという。⁽²⁵⁾ アメリカに永

住することを考えていたが、日本人排斥運動が広がり始めていたことを受け、一八九七年七月二十九日に帰国した⁽²⁶⁾。

帰国後は、『ジャパン・タイムズ』に短期間勤務して退職、一八九七年十月に外務省が政尾に対し、シヤム(タイ)の法律制度についての顧問職に就くよう依頼した。これを受けて、政尾は翌月にシヤムに赴いている⁽²⁷⁾。以後、政尾は日本とシヤムを往復しながら、シヤムの法典編纂や日本とシヤムとの交流などに尽力していくことになる⁽²⁸⁾。

続いて、第二回慶應義塾派遣留学生としてイェール大学に赴いた田中一貞を取り上げよう。田中に関しては川合隆男氏の研究があるため、それに依りながら、留学の経緯を追っておきたい。

田中は一八七二年に酒田県に生まれ、鶴岡蔵修学校、鶴岡朝陽高等小学校などを経て上京、東京英語学校や東京物理学校に学んだあと、一八九〇年十月に慶應義塾に入学⁽²⁹⁾し、文学部文科学科に進学、在学中には福沢諭吉とも交流をもった。一八九六年十二月に卒業し、宮崎県延岡の私塾・亮天社の教師として赴任、一九〇一年二月まで務めたあと、五月に林毅陸と共に第二回の慶應義塾派遣留学生に選ばれ、渡米することとなった⁽³¹⁾。一八九九年に開始された義塾の派遣留学生は、それまで外国人教師に依存していた大学の教育体制を改革すべく、理事の門野幾之進が、留学生を派遣して自前で教師を養成すべきだと提起⁽³²⁾し、専門的学問を日本語で語ることのできる日本人教師を育成するという目的で、派遣が決定されたものであった⁽³³⁾。

田中は一九〇一年からイェール大学の大学院で、同大学で政治学と社会学を担当していたウィリアム・G・サムナー教授などのもとで社会学研究に取り組み、翌年にマスター・オブ・アーツの学位を取得、その後フランスに移って、パリにあるコレージュ・ド・フランスのガブリエル・タルド教授に就いて社会心理学などを学び、欧州各国を視察して、一九〇四年三月二日に帰国した。川合氏によると、「サムナーは、アメリカ合衆国の歴史的

転換期における人々の行為や規範にみる『民習』(folkways)や『習律』(mores)の変化を自由主義、社会進化論の視点から考察しようとしていたアメリカ社会学を代表する創立者のひとり」であり、またタルドは、「判事、犯罪学者、社会学者、社会心理学者で、個人と個人の関係を基礎とする立場・社会的名目論の視点から社会現象を解明しようとして、『模倣の法則』(二八九〇)、『社会法則』(二八九三)、『世論と群衆』(二九〇一)を著わしていた」⁽³³⁾という。

田中は渡米前から社会学、社会心理学に開眼し、教育や論文の執筆、翻訳活動に熱心に取り組んでおり、留学の機会が訪れた際には、サムナーやタルドのことも知った上で、イエール大学とコレージュ・ド・フランスを留学先に選んだのであろう。帰国後、田中は一九〇四年四月に慶應義塾大学部教授に就任して、社会学とフランス語を教えることとなった。翌年には図書館監督(館長)を兼務し、その発展に尽力することになる。三田社会学会会長などを務めたあと、一九二二年九月二十三日に死去した。⁽³⁴⁾

田中が留学した一九〇一年に、イエール大学は創立二〇〇周年を迎え、記念祭や式典が開催された。田中は、「イエール大学二〇〇年祭の状況」と題するエッセイを『慶應義塾学報』に寄せ、記念祭が賑わっている様子を伝えつつ、「小生等もだまつて居るわけにも参らず、小生が主任になりて大なる角燈をつくること、相成候……日本人一同櫻色のガオンを着、手にく日本提燈を捧げ真先に国旗を推したて中央に此御所車に擬したる角燈を六人にて担ぎ、沿道の喝采を浴びながら、練り歩いたと伝えている。田中は、「何しろ一私立学校の祝賀炬火行列に儀仗兵を出し、大統領が態々学位を受けに出張するなど、実に日本の私立学校待遇とは余り違たものに候はずや」と嘆じた。⁽³⁵⁾

なお、田中はイエール大学を去るとき、「一年間住みなれて少なからざる利益を小弟に与へたる榆の都を去り申候東巖西崖イエールの校舎、王冠街、去るにのぞみて痛く別の惜まれて異邦なから故郷を去るの感あるも可笑

し」と日記に記し、イエールへの愛惜の情を示している⁽³⁶⁾。

柴田一能の留学については、安中尚史氏の研究がある⁽³⁷⁾。以下、主にそれに沿って、留学の経緯をみていこう。

柴田は一八七三年に丹後国に生まれ、一八九六年一月に慶應義塾に入学⁽³⁸⁾、在学中に東京の仏教青年会、三田仏教会のメンバーとなった。一九〇一年四月に大学部文学科卒業後⁽³⁹⁾、山口高等学校の教授に招聘されようとしたところ、イエール大学に留学することになり、帰国後は日蓮宗大学林設立委員会の秘書役として活躍、義塾から協力を受けて同大学林設立申請書類を作成し、設立後は、同大学林の中等科教頭、慶應義塾大学部教授、日蓮宗衆務総監などを歴任して、アメリカへの海外布教にも力を入れた。一九五一年に没している⁽⁴⁰⁾。

柴田がイエール大学に留学することになったのは、先述の田中一貞に同行することになったためである。柴田は田中と共に一九〇一年五月二十八日に横浜を出発し、六月二十二日にイエールのあるコネチカット州ニューヘブンに到着、曹洞宗からの留学生である山崎快英と三名でイエールに入学した。その際、慶應義塾の同窓生である松本宗吾の案内で入学手続きをしている⁽⁴¹⁾。イエールにも、義塾のネットワークが存在していたことがうかがえる。

柴田はイエール在学中、こうした慶應義塾のネットワークを強化しようと努めたようで、一九〇二年十一月、第一回義塾派遣留学生の神戸寅次郎がドイツ留学から帰国の途上、イエールに立ち寄った際には、山崎、蔵田、平野と共に「イエール大学に於ける義塾同窓会」を開催し、発起人を代表して、「神戸氏の来米を機としてイエール大学に同窓会の基礎を置く事を得たるの幸ひを喜び、這度神戸氏の成業は義塾の将来の爲め帝国の文化の爲めに一大白を挙げて祝すべき事にして向後第二、第三と新進留学生の欧米に派遣せらるゝは勿論の事一般塾員同窓にも、学業なり商工業なり夫々志す所に従つて続々と海外に出遊する者の日一日より加はり来らん事を望む」と挨拶している⁽⁴²⁾。また、翌年二月三日の福沢論吉の命日には、「イエール大学に於ける故福沢先生第三週年紀年会」が

催されて、柴田、山崎、蔵田などが集まって「先生の感化の下に人となりし吾等……海外遠遊の身の、唯だ心ばかりの香華を手向けて、今も尚ほ歴として吾等の精神に生き給へる、故先生の徳を偲」んだが、「故先生の霊を祭る」との文章を読み上げ、この会の開催を義塾に報告したのも柴田であつた。⁽⁴³⁾

柴田はイエール大学で、ジョージ・T・ラッド教授に師事して、哲学・倫理学・宗教学の研究に従事し、在学中には釈尊降誕会を田中や山崎などと催し、日蓮聖人立教開宗六五〇年を記念する講演会も開催して、柴田は「宗祖伝」、山崎は「開宗記念会に際して所信をのぶ」と題する講演をしている。一九〇二年、「カント学及び実在論管見」と題する論文でマスター・オブ・アーツの学位を受けたが、当時の柴田の様子は日本の新聞でも報じられており、『東京朝日新聞』は、「柴田一能氏（二十八）ハエール大学に入りラッド博士の教授を受け居れるが此程同校に於て講義の節学生及び教授等に対し仏教の大乗起信論を説き現今最高の哲学思想と称せらるゝ」と、学生や教授陣に仏教教説を説いていたことがうかがえる。⁽⁴⁴⁾翌年にイエール哲学会で日本人留学生による講演会が開催されると、柴田は「日宗教義の一斑」、山崎は「禅宗とは何ぞや」、同志社から留学していた村田勤が「キリスト教の立場より真宗を論ず」と題して講演した。ヨーロッパを視察したあと、同年九月十五日に帰国している。⁽⁴⁵⁾

ラッドはイエール大学哲学部でカントを中心に研究・教授した哲学者、また心理学者、神学者で、親日家としても知られ、日本人留学生のために奨学金を設け、自らも学資を援助するなど、その受け入れにきわめて積極的な人物であつた。ラッドに師事した松本亦太郎は、「日本学生でラッド教授の講義や演習に或る期間出席し其教を受けた品性上の薰陶を受けたものは甚だ多い」と述べている。⁽⁴⁶⁾実際、同志社からイエールに留学した森田久万人（のち、同志社神学校教授）、浮田和民（のち、早稲田大学教授）、小崎弘道（当時、同志社社長）、三宅亥四郎（のち、早稲田大学教授）なども、柴田と同時期にラッドに師事している。⁽⁴⁷⁾ラッド自身、一八九二年、一八九九年、一九〇六年から一九〇七年にかけて、と三度の来日を果たし、勲二等旭日重光章を授与された。⁽⁴⁸⁾田中が際会した

イエール大学創立二〇〇周年記念式典において、伊藤博文と鳩山和夫に名誉博士号が授与されているが、彼等への授与を斡旋したのもラッドであった。⁽⁴⁹⁾

柴田は、宗教哲学という専門分野はもとより、ラッドのこうした親日的な姿勢に期待して、師事することとなり、ラッドもこれを歓迎したのであろう。山崎も哲学を専攻し、また柴田と行動を共にしていることから、やはりラッドに師事していた可能性が高い。柴田と同時期に同志社からイエール大学に留学し、ラッドに学んだ河邊治六（のち、慶應義塾大学教授⁽⁵⁰⁾）は、「彼の哲学的思索は基督教から入ったものであつて、終まで基督教主義を離れなかつた。彼は自己の宗教の忠義なる擁護者であつた……その思想といひ人格といひ比較的保守的色彩を帯び穩健着実であつたから、当時米國で優勢であつたや、保守に傾いた思想界から非常に重ぜられたも偶然でない」とラッドを評している。⁽⁵¹⁾ こうした宗教的、保守的影響を、柴田も多分に受けたに違いない。なお、柴田は帰国後もラッドとの交際を続けており、一九〇四年には、柴田訳によるラッドの講演筆記が『慶應義塾学報』に掲載されている。⁽⁵²⁾

田中もラッドと接点があり、一九一三年から翌年にかけて欧米視察に出かけた際には、イエール大学を訪問し、ラッドの家に泊まっている。おそらく、留学中から面識があつたのであろう。田中によると、そこは伊藤が式典出席の際に泊まった家であり、「夫婦共非常な日本臍員で夫人は復日本に行き度くてホームシックに罹つて居ると語られ、家中一杯に飾つてある日本の美術品に就て一々説明して聞かせられたが、日本でも容易に見られぬ貴重な陶器や紺地金泥の古写経杯があつた。朝などはラッド博士が筒袖の糸織の着物を着て、縮緬の兵児帯を締め出て来ることもあつた」という。また、当時イエールで教鞭を執つていた朝河貫一がラッド宅の夕食に招かれると、ラッドは朝河に「日本の利益となるべき書類や新聞の切抜を示し、自分の健康が許すならば之を纏めて一冊の本にしたいが其れも叶わぬ」として、これを基礎に博士論文を書く学生を紹介してほしいと述べたという。

田中はこれを見て、「博士が日本を思ふことの厚き実に感謝に堪へぬ次第である」と記している。⁽⁵³⁾ ラッドが、日本とイエール、また慶應義塾とイエールを結びつける上で、重要な役割を果たしていたことが理解されよう。

なお、柴田は日蓮宗の正式な留学生として派遣されており、出発に際しては日蓮宗青年同志会や日蓮宗大檀林有志らによる送別会、告別演説会が開かれ、日蓮宗管長から法華経と折五条が贈られている。日蓮宗から経済的な援助があつた可能性も高い。⁽⁵⁴⁾

柴田と山崎の留学のあと、慶應義塾からの留学生は、専ら経済学を学びにイエール大学に留学していくことになる。その経緯や背景は不明だが、例えば鈴木市之助はイエールで経済学を学んで帰国後、旭電化工業の常務に就任、社長を務めており、⁽⁵⁵⁾ 同時期にやはりイエールで経済学を専攻した藤山九一は、帰国後に日東化工の監査役となつている。⁽⁵⁶⁾ 経済界での活躍を目指して、イエールで経済学を学んだ人々が多かつたのであろう。例外は、高橋政次郎と岡本謙三郎で、このうち高橋は、一八八八年二月十五日に慶應義塾に入り、⁽⁵⁷⁾ 一九〇〇年九月まで学んで渡米、一九〇一年にローウェル高校、一九〇四年にミルトン・カレッジに進学し、一九〇六年からイエール大学で歴史学を専攻した。⁽⁵⁸⁾ あえて歴史学を学んだ理由は定かでないが、中等教育段階からアメリカで教育を受けたことが、ほかの留学生との相違点になつているのかもしれない。

高橋のイエール大学在学中に、慶應義塾派遣留学生としてイエールに入学した岡本謙三郎は、一八八三年に福沢諭吉の側近として知られる岡本貞休の次男として東京に生まれ、芝区三田南海小学校を経て、一八九七年四月に慶應義塾普通部に入学、大学部では当初は法律科に属したが、文学科に転じ、一九〇七年三月に文学科を卒業後、同年七月にイエールに派遣された。⁽⁵⁹⁾ 義塾在学中から主に英国の古代文学を研究したが、絵画にも詳しくあった。友人の山下吉三郎と安藤復蔵によると、イエールを修了後、英国に行つてロンドンの図書館で英文学書を読む傍ら、美術館に足を運んでいたといふ。⁽⁶⁰⁾ やはり友人の下田将美も、岡本の「文学観は絵画と切り離して考へること

はどうしても出来ない」とした上で、イエールでは英文学やアルフレッド・テニスン、ロバート・ブラウニングなどの詩に関心を寄せ、スピノザやデカルトの思想との関係性について研究していたという。修士論文のタイトルは「詩の理論」であった。一九〇九年十二月に帰国後、翌月に慶應義塾大学部教授となり、古典英文学の研究に従事したが、すぐに病に伏してしまい、一九一二年十月一日に没した⁽⁶¹⁾。死去した際、イエールで英文学を教えていたウィリアム・L・フェルプス教授から貞然に、「小生は御令息の麗はしき御心情と才芸とを敬し、その人格を愛し居り候」といった手紙が届いているので、イエールでは主にフェルプスに師事していたのであろう⁽⁶²⁾。

このため、帰国後の業績はあまり残されていないが、留学中に、岡本は「イエール大学生活」と題する文章を『慶應義塾学報』に寄せている。そこで岡本は、日本や中国からの留学生の近況や、ハーバードと比較したイエールの校風などについて伝え、「小生はイエール学生々活を知る便利上 Student apartment に下宿致居候。同宿の学生の多くは Freshmen か或は Junior にて、小生が一番の先輩なるには少しく恐縮致し居候。彼等は小生を呼んで Old Boy と申し候。種々面白き校風など知る事を得大に愉快に感じ申候」などと、寄宿舎生活について報告している⁽⁶³⁾。

四、むすび——留学の成果・意義

世紀転換期にイエール大学に学んだ慶應義塾関係者のうち、帰国後に活躍したのは政尾や田中、柴田などに限られ、ほぼ同時期に原田助、小崎弘道、横井時雄、牧野虎次という四名の、社長・総長を務める人材を送り出した同志社と比べると、地味な印象は否めない。明治期のイエール留学生者の総数も、同志社出身者は三十二名に上っている⁽⁶⁴⁾。

ただ、政尾の民法学、田中の社会学、柴田の哲学の継受による、法整備支援や社会学および哲学研究・教育への貢献は、イエール大学留学の意義として、見過ごされるべきではなからう。

香川氏は、政尾がシャムの立法作業や司法制度の改革、法の近代化に貢献した点を、高く評価している。それを可能にしたのは、日本法を英語に訳し、シャムの立法化に利用できたという、政尾の学識と語学力であった。⁽⁶⁵⁾ その意味で、アメリカ留学の意味は大きかった。もつとも、政尾が義塾にいたのは短期間に過ぎず、その後は東京専門学校や東京帝国大学の人脈を頼っているので、義塾の留学生としての位置付けは難しい。

一方、田中については、慶應義塾から派遣され、義塾の教授として社会学と図書館の発展に尽力した。川合氏は、「田中一貞の社会学観、社会学論」について、「当時の東京帝大の建部遯吾らの国家有機体説を軸とする社会学観と対比して、むしろ個人間の関係を根本現象として重視、個人の社会関係を基礎とする社会学における心理学的社会学という新たな学問傾向を推し進め、また塾の社会学の中心的存在を担った」と評価している。⁽⁶⁶⁾ 寺川隆一郎氏は、こうした個人主義的な社会学説は、「サムナー、タルドゆずり」のものだと指摘し、「田中が監督に就任してからの図書館の発展は目覚ましいものがある」として、慶應義塾図書館発展への貢献についても強調する。⁽⁶⁷⁾

田中と共に留学した柴田は、イエール大学在学中の一九〇二年に日蓮の立教開宗から六五〇年を迎えた。日蓮宗内ではこれを契機とした様々な改革案が練られ、特に教育の重要性が強調されている。柴田の派遣はその一環であった。⁽⁶⁸⁾ 柴田自身がイエールで修士号を得て帰国し、その後日蓮宗大学林中等科教頭などを務めたことは、こうした日蓮宗のニーズに応えたものであったと言えよう。慶應義塾では大学の教授として一九〇四年から一九〇六年にかけて「哲学概論」を担当しており、ラッドから学んだカントを中心とする哲学を講じていたものと思われる。先述の河邊も、帰国後に慶應義塾大学部教授となつて「哲学概論」や「倫理学」などを教え、ラッド哲学の系譜を受け継いでいる。⁽⁷⁰⁾ 彼等の留学経験は、義塾の哲学教育・研究史を考える上で、無視できない。⁽⁷¹⁾

詩と哲学の関係を探究した岡本は、イエール大学時代にも画家として多くの作品を描いており、留学の前後には美術論も書き残している。⁽⁷²⁾ 帰国後の入院中、一九一一年に記した論文では、ターナーの風景画を分析して、そこに「他の画家に一寸見られぬだけの分量で時間の感がある」と評した。⁽⁷³⁾ フェルプスは、「御令息の彩管に成りし絵画は今猶茲にありて、深く賞讃致居候。御令息は誠の世界の市民、全き紳士と常に見受けられ、且つ良家の子弟にして善良なる教養をうけられたる事も承知致し居り候。小生はわが命のあらん限りその面影を忘るまじく小生が此世に別れて逝かん日には必ずかの世にて再会すべきを露疑はず候」と貞休に伝えている。⁽⁷⁴⁾ 夭折しなければ、英文学者や画家、美術評論家、哲学者として、歴史に名をとどめていたかもしれない。

イエール大学は、東京大学との間で二〇〇七年に「Today Yale Initiative」を設立して協力関係を築き、早稲田大学もまた、その卒業生である朝河貫一がイエールで日本人として初の教授となったこともあって、浅からぬ関係にある。しかし明治史を顧みると、ラッドをして「同志社とエール大学間に親密なる関係を生じたるを祝す⁽⁷⁵⁾」と言わしめたのは同志社であったし、それに続く密接な関係をもったのは慶應義塾であった。⁽⁷⁶⁾ これもまた一つの歴史的遺産として、顧みられるべきであろう。

- (1) 一八八九年四月日未詳付チャールズ・W・エリオット宛福沢諭吉書簡(慶應義塾編『福沢諭吉書簡集』第六卷、岩波書店、二〇〇二年)、一三三―一三六頁、「慶應義塾大学の設置」(前掲『福沢諭吉書簡集』第六卷)、四〇五―四〇七頁、「三人の招聘外国人教師」(福沢諭吉事典編集委員会編『福沢諭吉事典』慶應義塾、二〇一〇年)、一五九―一六〇頁。大学設置の経緯については、清岡暎一編/訳『慶應義塾大学の誕生―ハーバード大学よりの新資料』(慶應義塾、一九八三年)、白井堯子『福沢諭吉と宣教師たち―知られざる明治期の日英関係』(未來社、一九九九年)、なども参照。

- (2) ウィグモアについては、岩谷十郎「ウィグモアの法律学校―明治中期―アメリカ人法律家の試み」(『法学研究』

- 第六九巻一号、一九九六年一月)、岩谷十郎「ジョン・ヘンリー・ウイグモアの残した二つの契約書―日本関連文書」の構造とその研究」(『近代日本研究』第一三巻、一九九七年三月)、岩谷十郎「福沢諭吉とジョン・ヘンリー・ウイグモア―法律専門教育をめぐる二つのウイジョン」(安西敏三・岩谷十郎・森征一編著『福沢諭吉の法思想―視座・実践・影響』慶應義塾大学出版会、二〇〇二年)、ドロップパーズについては、西川俊作「G・ドロップパーズの履歴と業績」(『三田商学研究』第二六巻一号、一九八三年四月)、池田幸弘「ギャレット・ドロップパーズの経済学―ギャレット・ドロップパーズとドイツ歴史学派」(『近代日本研究』第一四巻、一九九八年三月)、池田幸弘「ギャレット・ドロップパーズとドイツ経済思想」(池田幸弘・小室正紀編著『近代日本と経済学―慶應義塾の経済学者たち』慶應義塾大学出版会、二〇一五年)、リスカムについては、土屋博政「ユニテリアンと福沢諭吉―Utilitarian Ⅱ自由キリスト教」(慶應義塾大学出版会、二〇〇四年) 附論「ウイリアム・リスカムとユニテリアン主義」など、参照。
- (3) 都倉武之「慶應義塾史上のハーバード―両者を結んだ人々」(『三田評論』第一一八九号、二〇一五年五月)、六四〇七〇頁。
- (4) 松本亦太郎「ラッド教授を追憶す」(『心理研究』第二〇巻一一八号、一九二二年)、二五〇頁。
- (5) 新渡戸稲造著/木下菊人訳『日米関係史』(新渡戸稲造全集編集委員会編『新渡戸稲造全集』第一七巻、教文館、一九八五年)、五四〇〜五四一頁。
- (6) 杉井六郎「イエールの日本人」(『同志社アメリカ研究』第一三三号、一九七七年三月)、九三頁。ちなみに、第三位は早稲田、第四位は東京帝国大学、第五位は東北学院、となっている(同前)。同志社とイエール大学との関係については、別稿において論じる予定である。
- (7) 辻直人「慶應義塾海外留学生の派遣実態とその意義」(『近代日本研究』第三〇巻、二〇一四年二月)、一二八〜一三二頁。
- (8) 慶應義塾では、一八七三年三月に卒業制度が設けられた(慶應義塾編『慶應義塾一〇〇年史』上巻、慶應義塾、一九五八年、四一〜四六一頁)。本稿では、卒業制度成立前に義塾を出た者、また成立後の卒業生、および退学、除籍となった者も含めて検討対象とするため、彼等を慶應義塾関係者と呼び、その基準を、義塾に入学・在籍した者とする。

- (9) 「イエール大学在籍者リスト」(前掲「イエールの日本人」、七二―九一頁。英文で、氏名や出身地、日本での最終学歴、イエール入学・在籍年度、所属学部・学科、下宿先、取得学位、典拠文献などが記されている。
- (10) 慶應義塾福沢研究センター編『慶應義塾入社帳』全六巻・索引(慶應義塾、一九八六年)。氏名や慶應義塾への入学年月、本籍、保証人などが記されている。
- (11) 慶應義塾塾監局『慶應義塾塾員姓名録』(一九〇五年八月―一九一〇年八月)、慶應義塾塾監局『慶應義塾塾員名簿』(一九一一年九月)。
- (12) 「卒業生名簿」(慶應義塾福沢研究センター蔵、福沢研究センター編『マイクロフィルム版福沢関係文書 福沢諭吉と慶應義塾(収録文書目録第三分冊・慶應義塾関係資料(二))』雄松堂、一九九一年、K5-A01-01)。
- (13) 「学籍簿」(慶應義塾大学学生部所蔵)。瀬川は、一九〇二年五月に慶應義塾大学部入学、一九〇七年二月に除籍されている(同前)。「渡米ノ為メ退学」しており、柳は一九〇三年九月に慶應義塾大学部入学、一九〇七年二月に除籍されている(同前)。なお、村山鉄次郎「わが国の体操の歴史―特に昭和初期までの器械体操について(その1) 明治時代の体操の展開」(『明治大学教養論集』第二二〇号、一九八九年三月)に、ウイスコンシン大学に転校した人物として慶應義塾器械体操部員の瀬川巖の名がある(一五頁)。渡米してまずウイスコンシンに入り、イエールに転じたのであろう。
- (14) 拙稿「初代日銀総裁・吉原重俊の思想形成と政策展開」(『法学研究』第八七巻九号、二〇一四年九月)、参照。
- (15) 津田・箕作・岡部の留学については、拙稿「津田純一の米國留学―イエール大学・ミシガン大学所蔵資料から」(『福沢手帖』第一八八号、二〇二一年三月)、一―一〇頁、溝口元「動物学者箕作佳吉、谷津直秀の滞米在学記録について」(『生物学史研究』第六四号、一九九九年一〇月)、六五―七五頁、拙著『評伝 岡部長職―明治を生きた最後の藩主』(慶應義塾大学出版会、二〇〇六年)、一四六―一五六頁、など参照。明治初期のイエール日本人留学生については、北口由望「明治初期のイエール大学日本人留学生―田尻福次郎が学んだカリキュラムを中心に(一)(二)」(『専修大学史紀要』第六・一〇号、二〇一四年三月・二〇一八年三月)、も参照。
- (16) 「維持資金借入れ運動の失敗」「塾塾宣言」「慶應義塾維持法案」(前掲『福沢論吉事典』)、一四七―一四九頁。
- (17) イエール大学図書館所蔵。同資料については、増井由紀美「朝河貫一―自覚ある「国際人」明治末から大正にかけてイエール大学に見る日本人研究者事情」(『敬愛大学国際研究』第一八号、二〇〇六年一二月)、参照。

- (18) 前掲「慶應義塾海外留学生の派遣実態とその意義」、一三七～一四三頁。
- (19) 前掲「イエール大学在籍者リスト」、八〇、八九頁。なお、一八九五年から一八九七年にかけて、イエール大学出身の弁護士であるヘンリー・T・テリーが慶應義塾大学部理財科・法律科で教鞭を執っており、このことも、義塾の学生がイエールを身近に感じるようになった要因のひとつかもしれない（慶應義塾一五〇年史資料集編集委員会編『慶應義塾一五〇年史資料集2 基礎資料編 教職員・教育体制資料集成』慶應義塾、二〇一六年、七六〇、一二六四～一二六五頁、慶應義塾編『慶應義塾一〇〇年史』別巻（大学編）、慶應義塾、一九六二年、四三九～四四〇頁）。テリーの業績や講義の様子などについては、東京帝大で授業を受けていた高柳賢三による追想などがある（高柳賢三「ヘンリー・T・テリー先生の追想」高柳賢三『米英の法律思潮』海口書店、一九四八年、三二五～三三二頁、「高柳賢三先生にきく（二）——日本における英米法研究の足跡をたどる（聞き手・伊藤正己・田中英夫）」『書齋の窓』第九七号、一九六二年一月、一～五頁）。
- (20) 前掲「慶應義塾海外留学生の派遣実態とその意義」、一三二～一四三頁。
- (21) 香川孝三『政尾藤吉伝―法整備支援国際協力の先駆者』（信山社出版、二〇〇二年）。
- (22) 前掲『慶應義塾入社帳』第四巻、一七頁。
- (23) 前掲『政尾藤吉伝―法整備支援国際協力の先駆者』、六～二六頁。東京専門学校では、一八八七年に英学科からはじめてのアメリカ留學生が生まれており、このことも政尾の留学志望の一因になったのではないかと、香川氏は指摘している（同前、二七～二八頁）。当時の東京専門学校からの英米留學生については、武田勝彦「東京専門学校海外留學生の航跡」（『早稲田大学史記要』第二八号、一九九六年九月）、七七～一〇八頁、参照。また、今村賢司氏は、喜多学校時代の恩師である青山彦太郎の影響でアメリカ留學を希望したとする（今村賢司「法学博士・政尾藤吉の生涯をたどる」『温古』復刊第三二号、二〇〇九年三月、四頁）。
- (24) 松本亦太郎「エール在学中の政尾博士」（政尾隆二郎編『政尾藤吉追悼録』政尾隆二郎、一九二二年）、二七～二八頁。
- (25) 三木栄「政尾公使伝」（前掲『政尾藤吉追悼録』）、八頁。
- (26) 前掲『政尾藤吉伝―法整備支援国際協力の先駆者』、二八～四四頁。

- (27) 前掲『政尾藤吉伝―法整備支援国際協力の先駆者』、六二―七四頁、前掲「法学博士・政尾藤吉の生涯をたどる」、五―六頁。
- (28) 詳しくは、前掲『政尾藤吉伝―法整備支援国際協力の先駆者』、七四頁以下、香川孝三「政尾藤吉の業績と現代法の整備支援事業との比較」(『アジア法研究二〇〇九』第三号、二〇〇九年一〇月)、五一―五六頁、飯田順「タイ法の発展と政尾藤吉」(『ジュリスト』第一一二二号、一九九七年一〇月一五日)、一〇二頁、前掲「法学博士・政尾藤吉の生涯をたどる」、五―二二頁、など参照。なお、政尾は一九〇〇年五月に帰国した際、東京帝大の穂積陳重と梅謙次郎から博士論文を提出するよう薦められ、一九〇三年に「シャムの古代法に関する研究」と題する論文で、法学博士号を授与されている(前掲『政尾藤吉伝―法整備支援国際協力の先駆者』、九八―九九頁)。
- (29) 川合隆男『近代日本社会学の展開―学問運動としての社会学の制度化』(恒星社厚生閣、二〇〇三年) 第四章「慶應義塾初代社会学教授 田中一貞」。
- (30) 前掲『慶應義塾入社帳』第四卷、一六三頁。
- (31) 前掲『近代日本社会学の展開―学問運動としての社会学の制度化』、一七三―一七八頁。林と田中に義塾から支給された留学費の詳細については、慶應義塾編『慶應義塾一〇〇年史』中巻(前)(慶應義塾、一九六〇年)、三二二頁、渡辺實『近代日本海外留学生史』下(講談社、一九七八年)、八一―九頁、参照。田中が留学中に日本に送ろうとした絵葉書の下書きが残っており、そこには下宿先の「婆さんは私の学費を吹き散らしてゐる始末」とあり、「学資の件……慶應よりの補助にあらざれば他よりは一切借用したいとは存しません」との苦悩がつけられている(「田中一貞家旧蔵資料」慶應義塾福沢研究センター蔵、受入番号・KI100127)。
- (32) 前掲「慶應義塾海外留学生の派遣実態とその意義」、一二五―一二七頁、前掲『近代日本海外留学生史』下、七九四―七九五頁、前掲『慶應義塾一〇〇年史』中巻(前)、三三三頁。
- (33) 前掲『近代日本社会学の展開―学問運動としての社会学の制度化』、一七八―一八五頁。
- (34) 前掲『近代日本社会学の展開―学問運動としての社会学の制度化』、一七八―一九三頁。
- (35) 田中一貞「エール大学二〇〇年祭の状況」(『慶應義塾学報』第四七号、一九〇一年二月、四一―四三頁)。
- (36) 田中一貞「大西洋横断日記」(『さ、やき』第一巻五号、一九〇八年十一月、二〇頁。こうしたイェールへの愛

- 着からか、帰国後、田中は「エール大学同窓会幹事」を務めており、一九一五年二月には、浮田和民と田尻稲次郎から欠席を知らせる葉書が届いている（前掲「田中一貞家旧蔵資料」、受入番号・K11100125）。
- (37) 安中尚史「近代日蓮宗の海外留学についての一考察」(『印度学仏教学研究』第四二卷二号、一九九四年三月)。
- (38) 前掲『慶應義塾入社帳』第四卷、四四三頁。
- (39) 丸山信『福沢論吉門下』(日外アソシエーツ、一九九五年)、一七四頁。
- (40) 前掲「近代日蓮宗の海外留学についての一考察」、二五〇～二五一頁。
- (41) 前掲「近代日蓮宗の海外留学についての一考察」、二五一～二五二頁。柴田の、新橋出発から横浜出航、太平洋横断の過程については、柴田一能「渡米雑記」(『禅文化研究所編「禅僧留学事始」』禅文化研究所、一九九〇年、三七～三二五頁)、参照。初出は『日宗新報』第七八二号、一九〇一年七月八日。ビクトリア港到着からニューヨークまでの旅程については、柴田一能「北米大陸横断の記」(前掲「禅僧留学事始」、三二六～三四五頁)、参照。初出は『日宗新報』第七八四・七八八・七八九号、一九〇一年七月二八日・九月八日・九月一八日。松本宗吾は、一八七七年に三重県に生まれ、同志社を経て、一八九六年一月に慶應義塾に入り、卒業後に渡米、イーストマン・ビジネス・カレッジに留学したあとイエール大学に入学した。政治学を専攻してマスター・オブ・アーツの学位を取得し、欧州を歴訪して帰国後、松本商會を創設して実業家として活躍したほか、衆議院議員にも選出されている(『人事興信録』データベース、<http://jahislaw.nagoya-u.ac.jp/who/docs/who4-9188>、二〇一一年一月一日アクセス、前掲『慶應義塾入社帳』第四卷、四四四頁)。
- (42) 「エール大学に於ける義塾同窓会」(『慶應義塾学報』第六〇号、一九〇三年一月)、一〇三～一〇五頁。
- (43) 「エール大学に於ける故福沢先生第三週年記念会」(『慶應義塾学報』第六二号、一九〇三年三月)、八四～八五頁。柴田は福沢没後の一九〇一年二月二三日に開催された「三週日ノ忌辰」において、慶應義塾大学部五年生総代として「嗚呼先生ノ形骸ハ先生ニアラス其ノ尊ク美ハシキ徳ト高ク懇ロナル教ヘコソ永ク乾坤ヲ照ラシテ我皇ノ土ヲ護リ我皇ノ人ヲ導キ玉ハン」との弔詞を読んでいる(弔詞「追悼の辞」慶應義塾福沢研究センター蔵、福沢研究センター編『マイクロフィルム版福沢関係文書 福沢論吉と慶應義塾(収録文書目録第四分冊・福沢論吉関係資料(二))』雄松堂、一九九五年、F8-F13②)。柴田が優秀な学生であったこと、また福沢に対して特別な思い入れを抱いていた

ことが察せられよう。実際、柴田は福沢と交流があり、高橋誠一郎によると、柴田が学生時代に寄宿舎の舎監を務めていた際、福沢からハンセン病患者の世話を薦められ、柴田自身、その救済に終生打ち込む決心でいたという（前掲『慶應義塾一〇〇年史』中巻（前）、七九二頁）。

(44) 『東京朝日新聞』一九〇二年七月二一日付朝刊。

(45) 前掲「近代日蓮宗の海外留学についての一考察」、二五二～二五三頁。柴田はイエルで開催した釈尊降誕会について、「楡樹の都に於ける釈尊降誕会」（前掲『禅僧留学事始』、初出は『日宗新報』第八一四号、一九〇二年五月二八日）と題する文章を記しており、「ここに北米新大陸における異教異俗の中央に介して這般生々たる喜望と理想とに充たされたる小祝会を大聖釈尊の御名の下に開設することを得たるは幸福、何たる冥加ぞや」と伝えている（三四六～三四九頁）。日蓮聖人立教開宗六五〇年記念講演会についても、柴田は「敢えて喜びを頌たんと欲す」（前掲『禅僧留学事始』、初出は『日宗新報』第八一五号、一九〇二年六月九日）との文章を記し、「諸士、生は満肚の赤誠を拵て宗祖の大前に額づき、感謝の祈禱を捧ぐるを禁ずるあたわざるにいたりぬ」と述べて、同会の様子を伝えている（三五〇～三五四頁）。イエル哲学会講演会に関しても、柴田は「改年劈頭の快事」（前掲『禅僧留学事始』、初出は『日宗新報』第八四三・八四五号、一九〇三年三月八日・三月二八日）においてその様子を報じ、会長としてラッドも出席して、活発な質疑応答が交わされていたとしている（三五五～三六〇頁）。

(46) 前掲「ラッド教授を追憶す」、二五〇～二五一頁。

(47) 荒川歩「同志社英学校からエール大学のラッドの元への森田久万人の派遣とその成果」（『心理学史・心理学論』第五号、二〇〇三年一月）、一五～二二頁、姜克實「浮田和民の思想的・倫理的・帝制主義の形成」（不二出版、二〇〇三年）、一六六～三〇〇頁、小崎弘道『小崎全集』第三卷（自叙伝）（小崎全集刊行会、一九三八年）、七八～九二頁、三宅亥四郎「ラッド教授の回想」（『心理研究』第二〇卷一八号、一九二一年）、二六二～二八一頁、参照。柴田は、留学前の段階で、イエルでラッドに師事して帰国した浮田和民と親交があったらしく、浮田の講義筆記を発表している（浮田和民講述／柴田一能筆記「欧洲現時之社会観」『六合雜誌』第二一五号、一八九八年一月、四五～五三頁）。柴田は浮田を通して、かねてよりイエル大学やラッドに関心をもち、留学の機会をうかがっていたのかもしれない。

- (48) 高砂美樹「G・T・ラッドと日本の心理学」(『心理学ワールド』第五六号、二〇二二年一月)、二一〜三頁。
- (49) 前掲「ラッド教授の回想」、二六四頁。伊藤への博士号授与の政治外交史的意義については、拙稿「伊藤博文への博士号授与と日米外交―「文明」の普及をめぐる―」(『法学研究』第八七卷一〇号、二〇一四年一〇月)、参照。なお、『慶應義塾学報』には、「柴田木公」による「エル大学記念式所感」が掲載されており、セオドア・ローズヴェルト大統領が他の人々と同様に名誉博士号を授与されたことについて「所謂米国有の平民主義」の実例として特筆している(柴田木公「エル大学記念式所感」『慶應義塾学報』第四八号、一九〇二年一月、三〇〜三二頁)。当時、イエール大学に留学していた柴田姓の慶應義塾関係者は柴田一能しかいなかったため、これは一能によるものである。柴田は一九〇三年五月にも、『慶應義塾学報』に、同名でイエールの学生生活、特に舞踏会について紹介する記事を書いている(柴田木公「米国青年の学校生活」『慶應義塾学報』第六五号、一九〇三年五月、二六〜三二頁)。
- (50) 前掲「イエール大学在籍者リスト」、七七頁。
- (51) 河邊治六「ラッド博士を追想す」(『心理研究』第二〇卷一一八号、一九二二年)、二五七〜二六一頁。
- (52) ラッド博士演／柴田一能訳「催眠術と法律の関係」(『慶應義塾学報』第七六号、一九〇四年四月)、一〇〜二二頁、ラッド博士演／柴田一能訳「催眠術と法律の関係(承前)」(『慶應義塾学報』第七八号、一九〇四年六月)、一二〜二二頁。
- (53) 田中一貞「世界道中かばんの塵」(岸田書店、一九一五年)、三四〇〜三四二頁。田中はこの視察中、ニューヘブソンを含めた欧米各地で多数の絵葉書を買求め、そこに現地名などを記して、一部は日本に送っている(前掲「田中一貞家旧蔵資料」、受入番号・1100126)。
- (54) 前掲「近代日蓮宗の海外留学についての一考察」、二五一〜二五二頁。
- (55) 『東京朝日新聞』一九一七年一月二八日付朝刊、『読売新聞』一九三八年四月二三日付朝刊。
- (56) 『東京朝日新聞』一九三八年八月二四日付夕刊。
- (57) 前掲「慶應義塾入社帳」第三卷、四八九頁。
- (58) 前掲「慶應義塾海外留学生の派遣実態とその意義」、一四三頁。
- (59) 前掲「慶應義塾入社帳」第四卷、五一八頁、「岡本謙三郎君略歴」(岡本謙三郎著／下田将美編『岡本謙三郎遺

- 墨】下田将美、一九一三年)。
- (60) 山下吉三郎・安藤復蔵「亡友回顧」(前掲『岡本謙三郎遺墨』、二五〇～二二頁。
- (61) 下田将美「一〇月一日の夕」(前掲『岡本謙三郎遺墨』、四一～四八頁、前掲「岡本謙三郎君略歴」。
- (62) 前掲『岡本謙三郎遺墨』、五二～五三頁。
- (63) 岡本謙三郎「エール大学生活―一月三日ニューハペンにて」(『慶應義塾学報』第一二八号、一九〇八年三月、五二～五四頁。このほか、イエール在学中に岡本は「学生と剣」と題するエッセイを記し、学生によって演じられた英国の戯曲について論じている(岡本謙三郎「学生と剣」『慶應義塾学報』第一四一号、一九〇九年四月、三二一～三七頁)。
- (64) 前掲「イエールの日本人」、七二～九三頁。
- (65) 前掲「政尾藤吉伝―法整備支援国際協力の先駆者」、二九八～二九九頁。
- (66) 前掲「近代日本社会学の展開―学問運動としての社会学の制度化」、一九三頁。
- (67) 寺川隆一郎「田中一貞」(Bibliographical Database of Keio Economics, <http://bdkeecon.keio.ac.jp/psninfo.php?psnid=41>、二〇二一年一月一日アクセス)。田中の図書館発展への寄与については、慶應義塾大学三田情報センター編『慶應義塾図書館史』(慶應義塾大学三田情報センター、一九七二年)、五一～六八頁、も参照。
- (68) 前掲「近代日蓮宗の海外留学についての一考察」、二五三頁。
- (69) 前掲「慶應義塾一五〇年史資料集 2 基礎資料編 教職員・教育体制資料集成」、五八九～五九〇頁。柴田はその後も慶應義塾大学部、同大学などにおいて、一九三七年まで論理学や心理学、倫理、修身などを教えた(同前)。
- (70) 前掲「ラッド博士を追想す」、二五七～二六一頁、柴田隆行「日本の哲学教育史(下の二)」(『井上円了センター年報』第一三三号、二〇〇四年七月)、一一八頁、前掲「慶應義塾一五〇年史資料集 2 基礎資料編 教職員・教育体制資料集成」、四〇〇～四〇三頁。
- (71) 柴田や河邊よりやや早く、イエール大学に留学した蔵原惟郭も、義塾で「哲学概論」「哲学史」「倫理学」などを教えている(前掲「日本の哲学教育史(下の二)」、一一八頁、前掲「慶應義塾一五〇年史資料集 2 基礎資料編 教職員・教育体制資料集成」、四五三頁)。蔵原は同志社入学生後、渡米してオーバーン神学校などに学んで博士号を取得、

帰国して再度渡米し、イエールに学んだ。詳しくは、田中良一「蔵原惟郭と市原盛宏―その人となりと業績」(同志社大学人文科学研究所編『熊本バンド研究―日本プロテスタントイズムの一流流と展開』みすず書房、一九六五年)、三八一―三九七頁、前掲「イエール大学在籍者リスト」、七九頁、参照。

(72) これらの絵画や美術論の一部は、前掲『岡本謙三郎遺墨』に収録されている。

(73) 岡本謙三郎「ターナーの風景画に現はれたる時間の感」(前掲『岡本謙三郎遺墨』、一三―二〇頁。『研精美術』第七八号(一九一三年九月)には、この論文と、「老子とスピノーザの宇宙観に就て」と題する岡本の論文が収録されている。後者は「宇宙の本原を以て実体となせるスピノーザの思想」と、老子の思想が共通すると説いたものである(七―一六頁)。

(74) 前掲『岡本謙三郎遺墨』、五二―五三頁。

(75) ラッド述『宗教哲学』(福音社、一八九二年)、一頁。これは同志社で行われたラッドの講義筆記である。

(76) 一九〇四年三月に、イエール大学の日本人同窓会である「エール大学会」が正式に発足したが、このとき会長に選出されたのは、鳩山和夫、岡部長職、箕作佳吉の三名であった(前掲『評伝 岡部長職―明治を生きた最後の藩主』、一五三頁)。鳩山は東京開成学校、岡部は慶應義塾、箕作は慶應義塾と大学南校に学んでいる。